

第十二回茶話会 餓鬼事経とお盆(二回目) 資料

餓鬼事経とは

原初聖典(紀元前一世紀)のお経

第十四話「舍利弗の母」が収録され、施餓鬼のルーツとされる

「舍利弗の母」

舍利弗尊者の四つ前の生で母だった者が、生前の業により餓鬼になっていた。尊者が目連尊者ら母の救いを求めて長老に相談した。目連尊者は王へその事情を話し、餓鬼に対して供養祭を行なうと女餓鬼は天界へ生まれました。この功德を目連尊者は世尊へと伝え、世尊はその内容を会衆に説法し、人々の利益となった。

盂蘭盆経とは

五・六世紀中国のお経。内容の類似から餓鬼事経を由来としたもの。

現代のお盆・施餓鬼

日本で八世紀ごろの浸透。旧暦七月十五日に執り行う。

仏教の盂蘭盆の教えと祖霊の御霊をおまつりする風習。

餓鬼飯を備え、先祖供養だけでなく、無縁仏や餓鬼道に堕ちた者の救いを願う。

佛説盂蘭盆經

西晋三蔵法師竺法護 詔を奉つて譯す

聞くこと是くの如し。一時、佛、舎衛國の祇樹給孤獨園に在り。大目蓮、始めて六通を得て、父母を度して乳哺の恩に報いんと欲す。即ち道眼を以て世間を

観視し、其の七母を見るに餓鬼の中に生じ、飲食を見ず、皮骨連なり立つ。目連、悲哀し、即ち鉢に飯を盛り、往きて其の母に餉る。母、鉢の飯を得て、便ち左手を以て鉢を障え、右手に飯を搏るに、食、未だ口に入れざるに化して火炭と成り、遂に食することを得ず。

目連、大いに叫び悲號涕泣し馳せ還りて、佛に白して、具さに陳ぶこと此くの如き。佛、言わく、一汝の母、罪根深結なれば、汝一人の力の奈何んともする所に非ず。汝、孝順の聲をもつて天地を動かすと雖も、天神・地祇・邪魔・外道・

道士・四天王神も亦、奈何んともすること能わず。當に十方諸衆僧の威神の力を須いて即ち解脱することを得べし。吾れ今、當に救濟の法を説き一切の難、皆憂苦を離れ令むべし。」

佛、目連に告げたまわく、「十方衆僧、七月十五日の
僧自恣の時に、當に七世の父母、及び現在の父母の厄
難中の者の爲に、飯百味・五果・汲灌盆器・香油・
挺燭・床敷・臥具を具え、世の甘味を盡して以って
盆中に着け、十方の大徳・衆僧に供養すべし。此の日

に當って、一切の聖衆、或は山間に在りて禪定し、
或は四道の果を得、或は樹下に在りて經行し、或
は六通自在にして聲聞・緣覺を教化するもの、或は
十地の菩薩大人の權現比丘、大衆の中に在りて皆同
じく心を一にして鉢和羅飯を受くるに、清淨戒を

具えて聖衆の道、其の徳、汪洋ならん。其れ、此等の
自恣僧を供養すること有らん者は、現在の父母、六親
眷屬、三途の苦を出で、時に應じて解脱し、衣食自然
なることを得ん。若し父母、現在せば、福樂百年、若
は七世の父母も天に生じ、自在に化生して天の華光

に入らん。」時に佛、十方衆僧に勅して、「皆、先に
施主の家の爲に呪願して七世の父母を願ひ、禪定し
意を定め、然る後に食を受けよ」初め食を受くる時、
先ず塔寺の中の佛前に安在し、佛の前の衆僧、呪願し
竟って更ち自ら食を受く。

その時、目連比丘、及び此の大會の大菩薩衆、皆大い
に歡喜し、目連の悲しみ啼泣する聲、釋然として除
滅す。是の時、目連の母、即ち是の日に於て一劫の
餓鬼の苦を脱るることを得たり。

目連、復佛に白して言さく「弟子所生の母、三寶功徳

の力を蒙ることを得たり、衆僧が威神の力の故なり。若し未來世一切の佛弟子も亦應に盂蘭盆を奉じて、現在の父母、乃至七世の父母を救度すべし。爾るべしと爲んや否や。」
佛、言わく「大いに善し、快き問いなり。我れ正に説

かんと欲するに、汝今復問えり。善男子、若し比丘・比丘尼・國王・太子・大臣・宰相・三公・百官・萬民・庶人有つて、慈孝を行ぜん者は、皆、應に先ず所生の現在の父母、過去七世の父母の爲に、七月十五日の佛歡喜の日、僧自恣の日に於いて、百味の飲食を以て

盂蘭盆の中に安じ、十方自恣僧に施し願わば、現在の父母の壽命百年にして病無く、一切苦惱の患い無く、乃至七世の父母、餓鬼の苦を離れて天人の中に生れ、福樂極まること無から使むべし。是の佛弟子、孝順を修する者は、應に念念の中、常に父母乃至七世

の父母を憶うべし。年年の七月十五日、當に孝慈を以て所生の父母を憶い、爲に盂蘭盆を作し、佛及び僧に施し、以て父母の長養・慈愛の恩に報ぜよ。若し一切の佛弟子、應當に是の法を奉持すべし。一時に目連比丘、四輩の弟子、歡喜し奉行せり。

佛說盂蘭盆經

第1話 田のむかし

【因縁譚】

王舎城おうしゃじょうに、たくさんの財産や所有物を持ち、何千億もの資産を築きあげた長者がいました。あまりにもたくさんの財産を持つていたので、彼は「大財長者」と呼ばれていました。

長者には一人息子がいました。彼は父母に溺愛されていました。

息子が分別のつく年齢になったころ、父母は、

「私たちの息子が毎日毎日一千万円ずつ使ったとしても、百年経ってもわが家の財産は尽きることはないだろう。息子が勉強するのに疲れてバテてしまうことのないように、望むままに富を使わせよう」

と考えて、一人息子に全然勉強させないまま、ただ、好きなだけ遊ばせていました。

さらに息子が結婚適齢期になると、父母は、良家の、美しく若く性的魅力をそなえた、でも世間の欲楽には関心を示すけれど宗教的な敬虔さや真理の探究には関心をもたない少女を、

息子の嫁に連れてきました。

息子は妻とともに享樂に耽り、宗教的なことにはまったく関心なく、出家修行者やバラモンや尊敬すべき先生たちを敬わず、不良たちに囲まれて喜び、世間の欲を樂しみむさぼり、無知蒙昧なまま時を過ごしました。

やがて父母が亡くなつてからも、息子は踊り子や歌い手たちと遊びほうけ、彼らにほしいままに財産を与えつづけ、まもなく財産をスツカラカンにし、破産してしまいました。しばらくは借金して生き長らえていましたが、すぐに借金もできなくなり、債権者たちに責められて田地や屋敷などを人手に渡し、それもなくなると、鉢を手にして乞食をしながら食いつなぎ、身寄りのない人びとのための救護施設に泊まるようになりました。

ある日、彼のところに盗賊たちが集まつてきて、誘いました。

「おいおまえ、なんでこんな苦しい生活をする必要があるか。おまえは若い。活力も素早さも力もある。どうして手足が欠けた者のように生きているのか。さあ来い。俺たちと一緒に盗みを働いて、他人の所有物を奪つて安樂な生活を送ろう」

「でも、私は盗みの仕方を知りません」

「俺たちがおまえに教えてやる。おまえはただ俺たちの言うとおりにすればよい」

「わかりました」

息子は同意して、彼らについて行きました。

さて、その盗賊たちはある屋敷の壁に穴をあけて中に入り、彼の手に大きな棍棒を持たせ、彼を穴のあいたところに見張りに立たせて、

「もしここに誰かほかの奴が来たら、そいつをこの棍棒で打ちのめせ」

と教えました。愚か者の彼は、それが良いことか悪いことかわからずに、ただ誰かほかの人が来るのを見張りながらそこに立っていました。一方、盗賊たちは家に入り、盗れるだけものを盗って、家の召使いたちに気づかれるやいなや、あちこちへ逃げて行きました。

召使いたちは大急ぎで走って行ってあちこちを見まわし、その男が穴のあいたところに立っているのを見つけ、

「おいここだ、盗賊がここにいる」

と捕らえて、手足を棍棒などで打って動けなくし、縛りあげて王宮に引き連れて行きました。

「王さま、これが屋敷の穴のあいたところで捕らえました盗賊でございます」

王は即座に裁決しました。

「この者の首を切り落とせ」

「承知しました、王さま」

と答えて、護衛たちは彼をつかまえ、後ろ手に堅く縛り、罪人の印の赤いキョウチクトウの花輪を首に巻き、砕いた煉瓦の粉を頭に塗り、処刑がおこなわれることを知らせる太鼓を打って道みちで知らせながら、大通りから大通りへ、路地から路地へと引き回し、鞭で叩き

ながら処刑場に連れて行きました。

「この町で盗みを働いていた盗賊がとうとう捕まった」

と、歓声が上がりました。

ちょうどそのとき、スラサーという名前の遊女が高楼にいて、窓越しに眺めて、彼がそのようにして連れて行かれるところを見かけました。以前から彼とは知り合いだだったので、

「あの人はこの町で栄華を誇っていたけれど、今はあのように、みじめで悲惨な状態になっているわ」

と、彼に対する憐れみの心を起し、砂糖菓子と飲みものを人をやって護衛に渡してもらい、「この人が砂糖菓子を食べて飲みものを飲むまでお待ちくださいますように」と告げてもらいました。

このとき目連尊者は「他の生命の転生先を知る」天眼智によって世界を見渡し、彼が悲惨な状態になっているのを見て、憐憫の情に心動かされました。

「この者は何の善業もおこなわずに悪業ばかりなしてきた。それによってこの者は死後、地獄に生まれるであろう。しかし、もし私がそこに行ったら、彼は彼がもらった砂糖菓子と飲みものを私に布施して、その福德によって土地神として生まれ変わるであろう。私がこの者の助けになるのもよいであろう」

と考え、飲みものと砂糖菓子が彼の前に運ばれているとき、目連尊者は神通力を使って、そ

の面前に立ちました。

長者の息子は目連尊者をまのあたりにして敬虔な気持ちになり、

「今まさに処刑されようとしている私にとって、この砂糖菓子を食べることに何の意味があるのか。しかしこの菓子は、彼岸（解脱）への道を進む人には、行路の食となる」

と考へて、砂糖菓子と飲みものを目連尊者にお布施しました。

尊者は彼の敬虔さを増すために、彼が見ているまさにその前で、その場にお座りになり、砂糖菓子を食し、飲みものを飲み終えて、座より立ち、去っていかれました。

さて、長者の息子は護衛たちに刑場に連れて行かれ、斬首されました。最上の福田（福德を積むための田地）である目連尊者に対しておこなったお布施という善業によって、彼は〔六段階の天界の下から二番目の〕三十三天に生まれ変わる価値があったのですが、

「スラサーのおかげで、私はこのお布施をおこなうことができた」

と、スラサーに対して愛着をもつたため、死ぬときに心が汚れてしまい、「目連尊者の天眼智のとおり」三十三天よりやや劣った、土地神に生まれ変わりました。森の中の大きなニグロダの樹に、樹神となって生まれたのです。

もしこの長者の息子が、若い時に家を継いで一生懸命働いていたならば、長者の中の最上の者になっていたであろう、中年の時であれば中位の、年老いた時であれば最下位の、それ

でも長者になっていたであろう、といわれています。あるいはもし、若い時に出家していたならば、阿羅漢あらかんになっていたであろう、中年の時であれば、一來者いちらいまたは不還者ふげんになっていたであろう、年老いた時であれば、預流者よるゆうになっていたであろう、といわれています。

しかしながら、彼は悪友たちとつき合うことによつて女性に耽り、酒におぼれ、悪いおこないに惹かれ、思慮分別に欠けた人間になり、やがて持っているものすべてを失い、とても悲惨な状態に陥つたのでした。

さて、その樹神はのちに、スラサーが庭園に行くのを見て欲情を起こし、暗闇を作り出して彼女を自分の住む境涯に連れて行き、七日間彼女と同棲し、それから自分の正体を彼女に告げました。

一方、スラサーの母は、娘が突然神隠しにあつたように行方不明になつたので、嘆き悲しみながらあちこちをさまよいました。そのようすを見て、人びとは声をかけました。

「神通力に長けた目連尊者なら、彼女の行方をきつとご存じでしょう。尊者のところへ行つてお聞きになるとよいでしょう」

母は尊者のところに行つて尋ねました。目連尊者は、

「これより七日目に竹林大精舎で世尊が説法されるとき、会衆の端に、あなたは娘のスラサーを見つけられるでしょう」

とおっしゃいました。

さて、スラサーはその樹神に頼みました。

「私はあなたの境涯に住むことはできません。今日でもう七日目です。私の母は私を見失って、嘆きと悲しみに打ちひしがれているでしょう。あなたさま、どうぞ私をもとの世界に連れて戻ってくださいませ」

樹神はスラサーを連れて行き、竹林精舎で世尊が説法されているときに、会衆の端にスラサーを立たせて、自分は見えない姿になってその側に立ちました。

人びとはスラサーを見つけて、口ぐちに言いました。

「スラサーさん！ あなたはこんなに何日もどこへ行っていったんですか？ あなたの母さんは、あなたを見失って嘆きと悲しみに打ちひしがれ、狂ったようになってしまいましたよ」

彼女は人びとに、ことの顛末を一部始終説明しました。そして人びとが、

「どうしてその長者の息子は、悪行為に耽り善行為をしなかったのに、樹神に生まれることができたのだろうか？」

と問うので、スラサーは、

「私が彼のために砂糖菓子と飲みものをあげたとき、彼はそれを目連尊者にお布施して、その福德によって樹神に生まれることができたのです」

と答えました。それを聞いて人びとには、

「それはすばらしいことだ。不思議なことだ」

という気持ちが生まれ、人びとは、

「まことに阿羅漢の方がたは、すべての生命にとって無上の福田ふくでんである。その方がたにわずかでもなされた善いおこないが、衆生に天界への生まれ変わりをもたらすとは」

と、大きな喜びと満足を覚えました。

比丘たちは、このできごとを世尊に報告しました。そのため世尊は、この由来によってこの三偈をお説きになりました。

- 1 阿羅漢たちは田のごとし。施主たちは農夫のごとし。施物は種子のごとし。これより（この布施行から）果報が生じる。
- 2 この種子と耕作と田は、施主のためにもなり、亡き者たちのためにもなる。亡き者たちはそれを享受し（布施行をともし喜び）、施主は福德により栄える。
- 3 この世において善をなし、亡き者たちのために供養をし、勝れたおこないをなした後、施主は天界に赴く。

【後譚】

三偈による釈尊の教説が終わったとき、その場に立っていた樹神やスラスラーや会衆をはじめとする八万四千もの生命に、因果の教えに対する明らかな智慧（アビサマヤ abhisamaya 現観）が生じました。

【解説】

釈尊による三偈には、布施などの善行が、施主自身のためにも亡き人のためにもなると説かれていました。

その由縁となった物語で説かれていたのは、亡くなった人に対するいわゆる追善の先祖供養や施餓鬼供養ではなく、本人は死ぬ直前にでも善行をおこない、周囲はそれを助け、後生の安寧につなげるという真剣勝負でした。

私たちの誰もがいつ死ぬともわからない不確かな人生を歩んでいるのですから、いつでも「チャンスあらば善行をおこなうぞ」という気持ちでいたほうが安全です。いつでも心を善のほうに向けていれば、いつ死んでも安心なのです。

しかもその善行を誰かのためにするなら、その功德は自分だけの徳にとどまらず、その誰かのためにもなります。

そして、善行を誰かのために廻向するなら、「みんな（一切衆生）のために」と廻向すれば、最大の風呂敷を広げていますから漏れる人はありません。自分が何か善行をしたな

ら、「この功德がみんな（一切衆生・生きとし生けるもの）のためになりますように」と、すべての生命に向かって廻向してあげるのが、仏教の常識です。たったそれだけのことで、みんなが幸せになります。

ちなみに阿羅漢、不還、一來、預流は悟りの四段階を表わす言葉です。阿羅漢は釈尊と同じ最高の悟り。不還と一來は煩惱がかなり減った段階で、前者は人間界に戻らず、後者は一回だけ戻ります。預流は悟りの流れに入った、いわゆる「不退転」の位です。

第2話 豚の口

【因縁譚】

今よりはるか昔、「釈尊の直前の」カツサパ仏の時代に、ある比丘びくが身業しんごうはよく慎んでいたので、口業くごうを慎まず、比丘たちをなじり、非難していました。彼は死後、地獄に生まれ、仏がおられない一時代分、地獄で焼かれつづけていました。

私たちの釈迦牟尼しやかにの時代になって、そのもと比丘は地獄で没し、同じ口による悪業の余波で餓鬼に生まれ、飢えと渴きにさいなまれながら、王舎城の近くの靈鷲山りょうじゆせんをさまよっていました。彼の身体は金色に輝いていましたが、口だけが豚の口でした。

そのころ、ナーラダ尊者は靈鷲山に住んでおられました。ある早朝、王舎城に托鉢に向かったとき、尊者はその餓鬼を見かけ、彼が何をなしたのか、偈で問いかけました。

1 「そなたは全身が金色で、四方に向けて光り輝いている。

しかし口だけは豚の口になっている。そなたは過去世で何をなしたのか？」

2 「私は身業を慎んでおりましたが、口業は慎んでおりませんでした。

そのため、ナーラダさま、ごらんのとおりの姿になりました。

3 それゆえ、ナーラダさま、申しあげます。口による悪業をなさいませぬように。

〔来世で〕豚の口になるようなことをなさいませぬように〕

【後譚】

ナーラダ尊者は王舎城に托鉢に入り、お帰りになってから、会衆の中におられた世尊にその餓鬼のことを報告なさいました。

世尊は、

「ナーラダよ、私も以前にその餓鬼を見ました」

とおっしゃって、さまざまな例を挙げて、口の悪業の不利益と口の善業の利得をお説きになりました。その教説は、大いに会衆のためになりました。

【解説】

この物語は、前世の悪業のために餓鬼に生まれて苦しむ因果応報を示すものですが、餓鬼の苦しみからの救済は説かれていません。むしろ逆に、餓鬼が「あなたは自分のような悪業

をして苦しむことのないように」と、悪因苦果から離れることを教えてくれています。このような、餓鬼の悪因苦果の状況だけを説く物語が、この『餓鬼事経』全五一話の半数以上を占めています。

餓鬼の悪因苦果を説くだけでも、それを聞いた人びとが悪業をひかえて善業にいそしむようになりますので、因果法則を教えるためにも、人間として正しく生きるための道徳を教えるためにも、とても有益です。

第3話 臭い口

【因縁譚】

今よりはるか昔、カッサバ仏の時代に、二人の良家の若者が出家して、戒を守って、ある村外れの僧坊で仲良く修行していました。

そこに、悪業になじみ、誹謗中傷を好む、ある悪比丘が訪ねてきました。二人はその比丘を温かく受け入れ僧坊に住まわせ、次の日に三人そろって、村に托鉢に出ました。村人たちは三人を敬い、最上の食をお布施しました。

悪比丘は、比丘たちを敬いもてなすその村人たちと、涼しくて水も豊富なその僧坊が気に入りました。しかし、

「あの二人の比丘がいるかぎり自分は居候でしかなく、ここで安楽に生活することはできない」

と考えて、二人を仲違いさせ、二人ともこの村から出ていくように作戦を練りました。